

## リレー随筆

## さあ、映画だ

鹿兒島大学病院 研修医 | 厚地 岳人

見てほしい映画を紹介していこう。先にゾンビ映画について論じている先生がいらっしゃるのでインパクトがあまりないと思われるが、自分が6,000字の原稿でできそうなことはこれぐらいなのでどうか大目に見てほしい。とはいえ医療関係だと大学でいくつか映画を勧められたことはあると思う。「レナードの朝」, 「かっこうの巣の上で」, なかには「赤ひげ」や「海と毒薬」(実写映画版), 「プレス, 幸せの呼吸」さらには「ミクロの決死圏」なども勧められた人がいるかもしれない。ここでは多かれ少なかれ医療と関わるだろうと思われる映画を紹介しようと思う。家族でも見ることができる作品も多数紹介するので、一人でも、みんなでも映画をお楽しみください。何でもこんな映画がと思った方、見た後でどうぞご連絡ください。

## メント

(2000年, クリストファー・ノーラン監督)

亡くなった妻の死因を探る。それだけならよくあるサスペンスである。しかし、主人公は記憶に障害を抱え、記憶を保てる時間は10分間。いたるところにまだ覚えていることを書いていき、必要ならば体にまでメモを残していく。過去にあった人物を初対面の人物として扱い、同じ話題を何度も話す。主人公が過去を覚えていないことを表現するために映画はエピソードからプロローグに向かって進んでいく。カラーで遡っていく現在とモノクロで進む過去が交互に映し出され、

過去と現在が交叉する先に真実が待ち受けている。

## コンテイジョン

(2011年, スティーヴン・ソダーバーグ監督)

コロナ禍で注目された作品がいくつかある。過去のパンデミックを題材にした小説「ペスト」(カミュ)や短編「赤き死の仮面」(ポー)などが話題になった。映像作品では「復活の日」や「アウトブレイク」などを見た人がいるかもしれない。「コンテイジョン」はそんな作品の内の一つだ。どのように感染症が伝播したかが最初に描かれる。手指衛生の授業でブラックライトに反応する塗料が手をうまく洗えていない場合、どこに付着するかを体験したことがあるだろうか。今作序盤で描かれるのはその体験の世界規模版だ。その後、感染爆発から事態の収束までが描かれる。現コロナ禍のように収束に取り組む人がいれば、誤情報を流す人も現れる。コロナ禍当初はどのようなだったかを思い起こさせる映画。

## JOKER

(2019年, トッド・フィリップス監督, R15+)

最近賛否吹き荒れる続編が公開されたアメコミでも有名なキャラクターである「ジョーカー」が誕生するまでの物語。就職先では退職を迫られ、精神疾患に苦しみ、社会保障が切り上げられ周囲の人間に頼れない男が陥ったあまりにも心地よい破滅。自分がジョーカーなんじゃないかと思う方々があちこちで

現れ、社会問題にもなった。映画を額面通りに受け取ることの危険性がこの映画では特に感じられる。ただし、適切な医療にたどり着くことができなくなることへの苦しみには共感したい。

### アンドロメダ…

(1971年、ロバート・ワイズ監督)

原作は映画化した小説「ジュラシック・パーク」が有名なマイケル・クライトンの小説「アンドロメダ病原体」と微妙に邦題が異なる。宇宙空間の微生物採取を目的にした探査衛星が小さな町に着陸し、死の町に変えてしまった。ヒントとなるのは開けられた形跡のある探査衛星カプセルやわずかな生存者。何が地球に降り立ったのかを探るSF映画。登場人物より先に物体の性質にあなたは気づくことができるだろうか。検疫のための施設にも注目してもらいたい。原作小説の公式続編「アンドロメダ病原体…変異」が出版されている。こちらは「アンドロメダ病原体」の主人公の息子が主人公となって事態の収束を図る。

### スローターハウス5

(1972年、ジョージ・ロイ・ヒル監督)

主人公が第二次世界大戦中、捕虜としてドイツのドレスデンにある食肉加工施設に収容されていた際に起きた爆撃により経験する人生の順番がばらばらになってしまう。「メント」は終わりから始まりに向かっていったが、この物語はランダムに進んでいく。明日事故にあうと分かっているにもかかわらず行動に移すことができない人生は主人公にどのような変化をもたらすのか。同名小説の映画化であり、主人公がうけたドレスデン爆撃も実際に作者が生き延びたものである。映画のラストは原作に付け加えられた場面だが原作者も納得の

出来だったようだ。

### チャッピー

(2015年、ニール・ブロムカンプ監督、PG12)

治安維持用の人工知能ロボットがひよんなことから幼児退行してしまった。そこに手を差し伸べたのは地元のギャング二人組。こうしてチャッピーと名付けられたロボットは立派な「ワル」になっていく。途中で開発者が合流し奇妙な育児環境が整備されるが、チャッピーは自身のバッテリーが交換不可能になっており、人間ならば寿命が近いことを自覚してしまう。チャッピーはどう行動していくのかといった内容。監督が南アフリカ共和国出身であり、ギャングの銃がカラフルになっているという地域特性がでている不思議なギャングSF育児映画。同監督の「エリジウム」では超医療格差社会が描かれる。

### めまい

(原題「Vertigo」1958年、アルフレッド・ヒッチコック監督)

かつて同僚を亡くし、高所恐怖症になってしまった元刑事が友からの依頼を引き受ける。妻の様子がおかしいから探してほしいといった内容だ。尾行するうちに女性に心惹かれてしまう。医療者がめまいの相談をされた時に必要なことはどんなめまいかを尋ねることではないだろうか。回転性、浮動性、あるいは眼前暗黒感と表現される日本語のめまい。英語では vertigo, blindness, dizzy と分けて使われているようだ。この映画「めまい」(vertigo)では浮動性めまいがどのようなものを視覚的に教えてくれる。茶目っ気のある監督がこっそり映画に登場するので探してみよう。

**パッセンジャー**

(2016年、モルテン・ティルドゥム監督)

宇宙版タイタニックと表現された本作、120年もの長期冷凍睡眠により他の惑星に移住する予定だったが何らかのアクシデントで一人だけ睡眠から目覚めてしまう。目的地まで残り90年、再度冷凍睡眠に入ることは不可能。特別客向けの娯楽施設は主人公の手助けにはならず、できるのは移住先で働くためのエンジニア講習と最低限の食事のみ。どうやって生きていくか究極の選択が迫られる。本作を見終わった後でタイタニック号の悲劇がなぜ起こったかを考えると本来とは違った目線で本作を楽しめる。

**砂の器**

(1974年、野村芳太郎監督)

複数回映像化されている松本清張原作の「砂の器」を最初に映像化した作品であり、今年でちょうど50周年になる作品。身元不明男性の遺体が見つかり、手掛かりとなるようなものは少なく、被害者は殺害前にバーで連れの客とズーズー弁で「カメダ」について話していた。一体「カメダ」とは何なのか。主人公刑事二人は足で調査を進めていく。様々な地域を訪れるために列車を乗り継いでいく様はさながら旅番組を見ているような雰囲気包まれる。終盤の犯人の動機について明かされる場面は圧巻であり大変見応えがある。

**ゲーニーズ**

(1985年、リチャード・ドナー監督)

やんちゃ少年軍団「ゲーニーズ」は屋根裏部屋を探索していた。資産家のアコギな借金を明日までに完済しなければ、土地を追われみんなと離れ離れになってしまう。そのため

にはなにか借金の足しになるようなものを見つけなければならなかった。そんな探索中に見つけたのは伝説の海賊が残した宝の地図だった。少年たちのお宝探しの冒険活劇。少年よ、それはもう少し丁寧に扱いなさいと思わずにはいられなくなる人もいるのではないだろうか。今作で出てくる喘息発作の描写はスティーヴン・キング作の小説を映像化した「スタンド・バイ・ミー」や「IT 前編」(テレビ映画版)にもみられ、当時の認識を知ることができる。

**ワンダー、君は太陽**

(2017年、スティーブン・チョボスキー監督)

トリーチャーコリンズ症候群のため赤ん坊のころから多くの手術を受ける必要があった。だから顔にもまだ手術の跡がある。容姿にコンプレックスを抱えた少年が周囲の人とかかわっていく。主人公だけでなく、家族や友達になる子どもたちにも焦点が当てられ、副題の意味に気づかされる。もととなったR・J・パラシオ作の小説「ワンダー」は翻訳されて出版されているほか、少し大きめの本屋なら英語小説の入門書として原書版を手にとることができる。ゲストとしてスターウォーズの有名キャラクターが出演している。

**ピーターラビット**

(2018年、ウィル・グラック監督)

世界一有名なうさぎパイが出てくるビアトリクス・ポターが書いた絵本ピーターラビットシリーズの実写映画であり、吹き替えは日本語訳絵本に準じた呼び方を用いている。頑固なマグレガーさんが亡くなったから農園を我が物にしようと画策したピーター達に、家を相続した甥がやってくるというお話。物語の中盤までで十分な学びを得ることができる。第一に不摂生は突然死につながる。第二

にアナフィラキシーは本当に致死的であり、直ちにエピペンを使う必要がある。絵本が原作の作品にしては物騒な内容だが農家と害獣の関係としては正しいのではないだろうか。今まさに患者の体内で増える病原菌を愛でる医者はいないだろう。2021年には続編も公開されて、そちらはいくらかファンタジー寄りで一作目と比べて物騒ではない。

### ファーザー

(2020年、フローリアン・ゼレール監督)

目の前のものが消える。突然人が現れる。これはホラーかスリラーかと思えるが、認知症を患った主人公の父の視点から描かれる世界である。認知症を患ったヘルパー嫌いの父に対して娘は何ができるのか。父親役を撮影時には80歳を超えている名優アンソニー・ホプキンスが熱演。原作は今作の監督による戯曲「Le Père 父」であり、過去にも「父はフロリダを夢見て」という題で映画化されている。最後の選択をあなたはどうか。

### アンドリュー NDR114

(1999年、クリス・コロンバス監督)

「早く人間になりたい」というフレーズを知っているのは何歳ぐらいなのかと思うが、とにかく今作のストーリーはシンプル。ロボットが人になろうとする。独創性をたまたま獲得したお手伝いロボットはいかにして周囲から人として認められる存在になるか。原作は前述した「ミクロの決死圏」や「アイ・ロボット」の原作者でもあり「ロボット工学 (robotics)」という言葉やロボット三原則に関わったアイザック・アシモフの小説。タイトルがネタバレになるような気がするのだからこの紹介は控える。

### メッセージ

(2016年、ドゥニ・ヴェルヌーヴ監督)

ある日地球上各地に現れたエイリアンといかにしてコミュニケーションをとるかというファーストコンタクト作品。異なる言語体系に対してどのようにアプローチするかは映像化により分かりやすくなっている。英語話者が英語で考え、日本語話者が日本語で考えるように人が獲得した言語によって考えることにSF的解釈を加えた作品。もう一つの重要な内容はこれまで紹介した映画の1つと似通っている。エイリアンの宇宙船のイメージが公開された際に米菓のばかうけに似ているというところから実際にばかうけとコラボしたポスターも制作されたお茶目な作品。原作短編はテッド・チャン作の「あなたの人生の物語」であり、短編集の表題作にもなっている。同名の書籍を購入すれば「理解」「七十二文字」などの他の短編とともに読むことができる。

### 怪物はささやく

(2016年、ファン・アントニオ・バヨナ監督)

少年にとって嫌なことはたくさんある。父は出て行って他の人と結婚し、母は病院に通ってばかり、近所に住んでいるおばあちゃんとは仲が悪い。自分の部屋から見ることもできるイチイの古木は気味が悪く、ここ最近よく覚えていないが悪夢を見る。ある日イチイの木が巨大な怪物となって動き出して、少年を捕らえて語り掛ける。「これからお前に3つの物語を順番に話してやる。全ての物語を終えた時おまえ自身の物語を話してもらおう。さもなくば命はない」。3つの物語はどれも異なる技法で表現されるため見どころたっぷり。作家パトリック・ネスの魂がこもった同名原作小説にふさわしい映像作品。

## 大怪獣ヨンガリ

(1967年、キム・ギドク監督)

視聴手段がかなり限られている映画だが、求めよさらば与えられんという表現があるように探せばあるはず。ゴジラブームに乗って作られた各国の怪獣映画の韓国版。韓国の怪獣映画と言えばこの作品と「パラサイト 半地下の家族」で国内の知名度が上昇したポン・ジュノ監督の「グエムル-漢江の怪物-」くらいだろうか。ストーリーもシンプルであり通常兵器をものともしない怪獣が出現し、人々が頭をひねって打開策を考えるという王道の展開。ガメラシリーズのように少年がメインに出てくることも大きな特徴だろう。少年の思いついた作戦の無邪気さが恐ろしい。

## ゴジラ対ヘドラ

(1971年、坂野義光監督)

ゴジラを知らない人がいるだろうか。「ゴジラ」(1954年)は時には原爆の資料として小学校の社会の教科書に載ることもある。この「ゴジラ対ヘドラ」も将来は教科書に載るのではないのだろうか。公害が怪獣ヘドラとなって人々に襲い掛かる。飛び散るヘドロ、光化学スモッグで息苦しそうに倒れる人々、錆びていく鉄筋、そして有害物質を羅列した歌詞で度肝を抜く主題歌「かえせ、太陽を」が高度経済成長期の影を映し出す。ゴジラが飛んだというのはこの作品の一側面にすぎない。星座の紹介や環境問題への警鐘と子供向けに制作されているはずなのだが、ホラー色が強い。体調を万全に整えたうえで見て欲しい強烈な個性を持つ映画。

## 東京ゴッドファーザーズ

(2003年、今敏監督)

こちらの掲載が12月号になりそうなので、

年末年始にピッタリでもある映画を紹介。クリスマスの日に家出少女を含むホームレス三人組はゴミ捨て場で赤ん坊を発見する。赤ん坊の母親を探すために年末のあわただしい東京を右往左往する。ホームレス三人組の過去が語られていく中で、赤ちゃんは無事に母親のもとにたどり着けるのかといった内容。手がけた今敏監督は「パーフェクトブルー」(R-15)、「パプリカ」,「千年女優」などで虚実入り混じった表現をしばしば用いるが今作ではその要素は控えめで、人情ものコメディとして見ていられる。人間模様と町模様が4人のさすらい人を優しく包み込む。

次号は、鹿児島大学病院／渡部 克哉先生のご執筆  
です。(編集委員会)